

近隣の自然の変化に目を向ける No. 57

「われら真夏の花ここにあり(その1と2):

We are flowers in hot summer Part 1 & 2」

2021年8月17日

梅雨明けと共にやって来た猛暑とコロナ・デルタ変異株による感染の増加によって生活感覚が狂わせられてしまったのではないかとその中で始まったオリンピックは、日本人アスリートが大活躍で予想をはるかに超えるメダルラッシュに、暑さもコロナの不安も忘れてTVによる観戦に目も耳も釘付けとなった(少なくとも私は)。そんな日常感覚を失った2週間で過ぎ、気づいてみればコロナ感染者が(東京では5000人超の)うなぎ上りとなっていた。オリンピック開催中は3つの台風が本州直撃することなかったのに、閉幕後は梅雨に逆戻りしたかのように前線が日本列島上に停滞し、記録的な豪雨が各地を次々に襲い甚大な被害をもたらしている。天地も私どもの生活も大揺れ状態だが、その中でも自分なりの羅針盤をもって進んでいるか?進めると言えるか?一人の(地球)市民として、一市民として考えさせられている。大それた事(問)ではなく、自然の変化を見ながら考えたのだ。

天地が激動しても自然界の草木は季節の変化に応じて成長し、自分なりの花を咲かせている(今年は例年よりも約2週間、開花が早いようだが)。そこで、今号は今年の夏に生命を輝かせている近隣の花たちを紹介する。

アサガオの花の色と柔らかな花弁は、暑い夏にも涼気を感じさせてくれる不思議な魅力がある。日本には朝顔祭があり、家々で鉢植えの朝顔を育てている理由が分かる。芦花公園には園の職員のおかげで**ウバユリ**が群生しているが、今年の開花は早かった。

オオトリトマは南アフリカ原産のユニークな花で、新体操のこん棒を想わせる。

リュウゼツランはメキシコの熱帯域に自生する植物で、茎からテキーラ酒が造られ、葉の繊維から織物が作られる。

タチアオイの学名 **althoea** はギリシア語の治療を意味し、古くから薬草としても使われて来た。花の色は赤、ピンク、白、紫、黄色など多彩で、炎天下次々と新しい花を咲かせ、2ヵ月近く咲き続ける。

昼咲月見草は、初夏から長期間咲き続ける丈夫な花で、アスファルトの道端でもよく見かける。**小待宵草**は、待宵草(月見草)よりも背丈が低く、小さく可憐な花を咲かせる。**ノーゼンカツラ**は、明るいオレンジ色のいくつもの花が滝のよう連なって咲くので、遠くからでも目を引く。**ハナビシソウ**は、黄色やオレンジ色の花が地面を覆うように咲き揃い、存在感のある丈夫な花だ。

昼顔は日本原産の花で、朝顔に似ている小型の花が昼間も咲き続けることが名前の由来。**白粉花(オンロイバナ)**には白だけでなく赤、黄、まだら色などの花がある。江戸時代には種の中の白い粉が化粧用に使われていた。

最近よく見かける可憐なゼフィランサスはタマスダレの仲間で、ヒガンバナ科に属する。ナツズイセンは淡いピンク色の美しい花で、秋に咲く紅色のヒガンバナと同じ科。葉が水仙に似ている。

チコリはヨーロッパではよく食卓に出る野菜。花は薄紫色の細い花弁が放射状に並び円形の花となっている。

青い矢車草が一般的だが、八重の濃い紫色や白色の花が栽培されている。

オリランソウ（花魁草）の名は、華やかな花の姿から付けられたと思ったら、花の香りが花魁の白い粉の香りに似ているかららしい。

フウチョウソウ（風蝶草）は蝶が舞う姿にも似た美しい花だ。

黄色の夏の花 2 種：キクイモ（モドキ）とオオハンゴウソウ。印象は、どちらもなぜか実直。

ギボウシには多くの種類がある。これは最も典型的な種。なお、擬宝珠とは橋や寺院の階段、欄干の柱の上に設けられているネギ坊主の形をした飾りのこと。

サボテンの花の際だった美しさと鮮やかな色にはいつも目を見張られる。乾燥地でも鮮やかに咲く姿は何を意味するのか？